

亦も運ぶ人々や耻かきふからまき 怨情の所志亦あ
まじかり 某子限をも 播代の者も述懐する者多く頼
なき主君ありと舌を振ひやると 語りける 倭前守諸人の
心を引見るといふも 少のりある 肺肝を思ふも 亦に中務卿
くちにより 大に恨む 只 隠密に 怨怒の情をかくし 山形に注
進せしやと思ひ 何となく 挨拶を中務卿より 義光
公 怨怒深く 情ある 大將と承る 今も 義光公 思ひ立給
も 山形より 一族の中に 及まぬ 日頃 親しく 信樂に 属
も 中務卿 公に 居る 玉ふき 幸ひ あれ 多き 山形に 注進
し 中身の 動氣は 免有る 様にと 倭前大に 悦び

此より 尾張より 通し 亦 即時に 大將 出馬 有し 先一昧の
心を 喰合 能く 示し 合に 交際 せき 折言 詞達 判りし 山形
へ 参りし とき 亦 安京 むとて 一族 養に 親しき 者 五人之
人 夜に 入る 頃 馳馬 あり 安京 多く 七更 中 亦 比 向く
同心 して 起証 書を 倭前 守に 渡し 多人 救二百 余人 あり
倭前 大に 悦び 亦 通 尾張 守 交 通し 多 依之 町 壬午 正月
廿 義光 公 救 千 騎 引 率し 清川 より 出陣 成され 多 悪風
形 是を 少も 害と 名 玉も 此 雪中に 何とて 出陣 有る こと
と 候ふ こと 居る 所 にも 板敷 山 へ 族の 多く 入る こと
いふ 亦 悪風 亦 不 害 しく 思ふ こと 山形 鎧を 着し 倭前 守を 呼